

石巻専修大創立30周年 ソフトバンクグループ連携プロジェクト

地域へ教育へ活動深化

Pepperプログラミング教室

石巻の小中生が受講

ソフトバンクグループ株式会社と創立30周年となる石巻専修大は本年度、人型ロボット「Pepper」(ペッパー)を活用した3年間の産学連携プロジェクトの最終年度を迎えた。石巻市を交えた包括連携協定が今年1月に締結され、地域、教育、産業の分野で活動はさらに深化する。Pepperを軸に展開されるプロジェクトの多様な取り組みを各現場から報告する。

2020年度に始まる次、プログラミング教育が順次、期学習指導要領で小中高に導入されることを受け、ソ

フトバンク株式会社と石巻専修大は、石巻地区の小中学生を対象としたプログラミング教室を実施している。

石巻市内の小中生向けの教室は今年3月、石巻専修大で始まった。Pepperにどういった行動をさせるか互いにアイデアを出し合い、実際にプログラムを作成して今月末ごろに成果を発表する計画。

同大経営学部の舩井道晴准教授が講師を務め、初回は4、5年生9人が参加した。同大の学生2人が支援し、実際にPepperに触れ、簡単な会話やゲームを楽しみながら動作に関する知識を学んだ。

教室は石巻市ICT総合推進室が共催した。佐藤宏幸室長は「プログラミングの考え方になじみ抵抗感なく取り組めるよう、まずは

んでいくプログラミングの方法を学んだ。ロボットコンテストは今年12月に開催される。教室に参加した生徒は「伝えた地域域の魅力」をテーマに60〜180秒のPR動画を制作し、Pepperを使って発表する予定。

「石巻教育研究会家庭科技術・家庭研究会」会長の奥田茂人矢本二中学校長は「プログラミングの設計は、試行錯誤の連続であり、創造を繰り返す作業になる。子どもたちにとって生きていく上で大事な要素になる」と教室の意義を語った。

試行錯誤重ね知識習得

Pepperに独自の動作をさせるプログラムを作成する生徒の



Pepperに触れながらプログラミングの楽しさを体験する児童



連携協定を結んだ(右から)池田昌人統括部長、亀山紘市長、尾池守学長

産学官3者で初の連携協定

ソフトバンク株式会社と石巻専修大、石巻市は、月、教育・スポーツと観光の振興など市の施策推進へ情報通信技術(ICT)を積極的に活用する包括連携協定を締結した。同大が産学官の3者で協定を結ぶのは初めて。

連携協定する分野は教育振興や訪日外国人旅行者(インバウンド)の拡大、健康増進、子育て支援など6分野。市の課題に対し、同大のICTツールを用い、石巻専修大が人材や人

いしのまきスイーツマップ作成



石巻市内の高校OGと高生でつくる「いしのまきスイーツマップ作成委員会」が、市内でお薦めの菓子店を網羅したマップを作り、市かわまち交流センターなどで配布している。

ユースアクション東北

思い込む若者に、おいしいスイーツ店があることを知ってもらい、地域活性化に貢献しようという企画した。マップには「初心者マーク」を大きく載せ、「マップを持って来た人には買わなくても歓迎する」というルールを作り、紹介店舗の了解を得たという。

若者視点でおいしい店紹介



スイーツマップを作成した(手前から)阿部さん、初貝さん、生平さん



ソフトバンク戦で和田投手(左)が見守る中で投球する植木さん

プロ野球ソフトバンク戦 復興支援企画で植木さん始球式

石巻専修大理工学部1年で硬式野球部に所属する植木貴之さんが、ヤフオクドーム(福岡市)であったプロ野球福岡ソフトバンク戦で始球式セレモニーを行った。

植木さんは、先発の和田投手が見守る中で1球を投じた。埼玉西武の秋山選手から空振り奪うと、マウンドに駆け寄った甲斐捕手から「ナイスピッチング」と声を掛けられ、記念のボールを受け取った。

植木さんは「豪華な選手を前に投球でき、夢のようで幸せな時間だった。文武両道が目標。これからも勉強と部活動の両方に力を入れ充実した学生生活を送りたい」と話した。

植木さんは石巻市出身。公益財団法人東日本大震災復興支援財団(東京)の高校生を対象とした給付型奨学金「まなべる基金」を活用し、石巻専修大に進学した。

始球式は7月10日の試合で行われた。ソフトバンク株式会社が招待した復興支援企画で、財団の奨学生だった植木さんが今回大抜

「まなべる基金」奨学生

石巻専修大創立30周年 ソフトバンクグループ連携プロジェクト

地域課題 Pepperと挑戦

石巻商高

伝承と防災アプリに

クイズ形式で開発へ

東日本大震災の伝承と災害への備えという地域課題の解決を目指し、石巻商高が独自のアプリ開発に挑戦している。

ソフトバンクグループが提供する「Pepper」社会貢献プログラムを活用したプロジェクトで、コンピュータ部の2年生4人が参加。石巻専修大理工学部の高橋智准教授の研究室が支援する。

アプリはクイズ形式でプログラミングし、小中学生向けを想定する。「河川に近い」「低地にある」といった地形的な特徴や防災に関する基礎知識を深めてもらうのが狙い。

作成したアプリは「防災クイズ」としてPepper市の震災伝承施設「南浜つた」で活用される。

6回の教室

小学生がプログラミング

石巻の魅力アピール

石巻市の小学4、5年生9人がこの夏、石巻専修大の講座で学んだ成果の発表会が今月1日、同大であり、実施されたプログラミング。

児童はPepperを活用して発表した。複数の選品をアピールした。



「防災クイズアプリ」の開発に向け、震災伝承施設「南浜つた」を見学する石巻商高の生徒



プログラミング教室で作った作品を発表する小学生

ツール・ド・東北2019から

TOMODACHIブース

三陸沿岸を舞台に14、15日に開かれた「ツール・ド・東北2019」(河北新報社、ヤフー主催)三陸河北新報社が主催で、全6コースのうち4コースの発着点となった石巻専修大に、ソフトバンクグループと連携した「TOMODACHI」の旗や大漁旗を振って、疾走するライダーを激励した。

感謝込めライダー応援



ツール・ド・東北のステージでライダーを激励するTOMODACHIブースの参加メンバー

地元貢献したい

仙台育英学園高3年 後藤 莉子さん(17)



石巻市十八成浜の出身で、東日本大震災で自宅が全壊しました。今回は石巻に貢献するきっかけとして参加し、沿道で旗を振って応援しました。国際力を養い、石巻のために活動できる人になりたいです。

何度も来てほしい

仙台育英学園高2年 磯野 めいさん(18)



中学生の頃から毎年ツール・ド・東北を見ていました。今回は地域のために活動したいと思い、参加しました。ライダーの人々には石巻のまちを見てもらい、何度も石巻に来るきっかけにしてほしいです。

活躍「スマートコーチ」

指導アプリ 走行フォーム 無料チェック

自転車を取り付ける専用装置が設置され、事前に申し込んだライダーが実際に自転車に乗ってフォームの撮影を受けた。

撮影後、須田さんはライダーと一緒にタブレット画面で動作を確認。ペダルの踏み方や足の動きに書き込みを入れながら、改善ポイント丁寧にアドバイスした。説明内容は録画され、



スマートコーチのアプリを使ってライダーのフォームをチェックする須田さん(右)

石巻専修大創立30周年 ソフトバンク連携プロジェクト

人材育成広がるICT

ソフトバンク株式会社と石巻専修大は、情報通信技術（ICT）を石巻圏の教育現場に取り入れ、人材育成や地域活性化につながる取り組みを展開している。人型ロボット「Pepper（ペッパー）」などを活用した高大産（高校・大学・企業）連携は、裾野を広げ、圏域の高校による地域の魅力や暮らしの情報発信、プログラミング学習の充実へと成果を生んでいる。

遠隔指導サービス「スマートコーチ」

効果的な活用策探る

ソフトバンク部活動支援に反映

石巻専修大

石巻専修大で10月24日、ソフトバンク株式会社の遠隔指導サービス「スマートコーチ」を活用した指導法を学ぶデータコーチング演習の初授業があった。硬式野球部の学生12人が受講した。

石巻市内の中学校で実践する部活動支援に生かす。同社CSR統括部長で、9月に客員教授に就いた池田昌人氏が講義した。

スマートコーチについて、一流アスリートが積み重ねて得たノウハウを価値

授業では学生たちが3人組になり、中学野球部の経験がないことを前提に、指導を支援するプランを模

キャリア開発で授業

自分を知り夢描こう

ソフトバンク学びの大切さ語る

石巻専修大で10月31日、キャリア開発の授業があ

た。ソフトバンク株式会社のCSR部門で働く横溝知

美さんが講師を務め、同社が導入する「シヨートタイムワーク制度」を紹介するとともに学生生活の学びの大切さを語った。

同制度は精神障がいや発達障がいなどで長時間勤務が難しい人も、週1日4時間など短時間から働ける機会を設ける仕組み。誰もが自分らしく活躍し、挑戦できる社会づくりを目指す。



スマートコーチについて解説する池田氏



キャリアの考え方を助言する横溝さん

教育現場でPepper活用



食の魅力の発信方法について意見を出し合う桜坂高と広島商高の生徒

食の魅力どう発信

桜坂高 広島商高と交流

石巻市桜坂高はPepperを使って地域の魅力を発信する「まちなかボスタープロジェクト」に取り組んでいる。3年目となる本年度のテーマは石巻の観光。活動の一環として10月18日、広島市の市広島商高と交流し、食の魅力の伝え方を考えた。

北高 プログラミング体験

基礎的なアプリを作成

Pepperを活用して、石巻北高の生徒2人が訪れ、桜坂高の生徒4人が迎えた。プロジェクトを支援する石巻専修大の井井道晴准教授が指導し、学生6人が参加した。

教授が指導し、同校1年の根本大誠さん(15)と辺見圭祐さん(16)が参加。プログ



石巻北高の生徒が受講したプログラミング体験会

プロジェクトの成果は12月、東松島市で開かれる「食の魅力を発信方法について意見を出し合う桜坂高と広島商高の生徒」で発表される。



文化祭でアプリ披露

石巻工高 2台連動「電気」解説
石巻工高電気部の生徒が、2台のPepperを会話させながら電気の安全な使い方を解説するアプリを開発し、同校で10月19日に行った文化祭「石工祭」で発表した。

石巻工高電気部の生徒が、2台のPepperを会話させながら電気の安全な使い方を解説するアプリを開発し、同校で10月19日に行った文化祭「石工祭」で発表した。

石巻専修大創立30周年 ソフトバンク連携プロジェクト

連携の成果 現場で実践

ソフトバンク株式会社と石巻専修大が展開する高大産・高校・大学・企業 連携プロジェクトは、石巻圏域の教育現場に多様な実践の場を提供している。石巻市内の中学校では部活動支援やプログラミング学習を、実施。人型ロボット「Pepper（ペッパー）」を活用した高校生の取り組みも地域に定着してきた。圏域の情報通信技術（ICT）教育を開拓する動きを紹介する。

ICTで野球指導

部活動支援本格スタート

スマートコーチ

ソフトバンクの遠隔指導 サービス「スマートコーチ」の活用。同社の情報通信技術を活用した中学校の部活動支援が11月30日、石巻専修大で始まった。同社と同大、同大経営学部の杉田博教



スマートコーチで撮影したフォームの動画をしながら中学生にアドバイスする学生

授の「データコーチング演習」として硬式野球部の学生12人が参加。山下中野球部の生徒9人が弱点克服とチーム強化に向け、専門的なアドバイスを受ける。初日は学生と生徒が同大体育館に集まり、ポジションごとに四つのグループに分かれてプレーした。学生は中学生の投球や打撃のフォーム、守備の際の足掻きなどを動画で撮影。画像を見ながら「窮屈な投げ方をしている」「グラブの使い方に癖がある」など改善ポイントを説明した。授業は来年2月上旬まで。



桃園琥太郎さん(13) 山下中2年

体重移動の課題解決

スマートコーチは1年の時に体験し、体重移動の課題が解決できた。今回は膝の力の使い方を指導されたので、学生の指導を受けた。目標は県大会出場。まずは1勝できるよう頑張る。

注意点意識し改善へ



佐藤 空人さん(14) 山下中2年

捕手としてキャッチングやスローイングのアドバイスをもった。重心のかけ方、腕の使い方を注意されたので意識して改善していく。捕手はみんなをまとめる役。チームを引っ張れる選手になりたい。

欠点教えてもらった



丸岡 侑右さん(14) 山下中2年

投球動作や守備の足の運び方について、動画を見ながら欠点を教えてもらった。自分では気付かなかった。1年の時はテイクバックに課題があり、先生の指導で解決できた。上達し公式試合で勝つたい。

技術指導に意義ある



金子 大翔さん(20) 石巻専修大3年

今は基礎を中心に指導している。プレーを見せるのは簡単でも教えるのは難しい。スマートコーチの意義は技術指導にある。画面を通して的確なコーチングができるよう、学生側も学び、理解を深めていきたい。

広がるPepper活用術



ロボコンに新部門 プログラミング腕競う

石巻地区中学校ロボットコンテストが1日、石巻専修大であり、新設されたPepperによる地域PR部門に6校12人がエントリーした。出場者はPepperの会話能力や自由度の高い動きを取り込みながらアイデアとプログラミング

の腕を競った。石巻地区中学校の生徒は東日本大震災の被災地を訪ねた。Pepperの声を高低を変え、複数の人々を演じさせるなど工夫を凝らした作品もあった。優勝は東松島市矢本二中1年の半沢悠希さん(13)の作品で、地元の特産品や地域の将来像を説明し、「復興のために働く人の存在が身にしみました」と締めくくった。門脇中の生徒の作品は石巻に引っ越してきた人に市内の歴史を伝える内容。生徒とPepperが掛け合

創意工夫で達成感 プログラミングを研修

石巻市河南東中で11月26日、Pepperを活用したプログラミング研修会が、生徒たちが自ら作ったプログラムでロボットを動かす楽しさや達成感を味わった。卓球部の生徒18人が参加。石巻専修大理工学部の高橋智准教授が講師を務

めた。Pepperに話しかけるプログラムにも挑戦。Pepper本体にプログラムを入れ、イメージ通りに動く、音声が入った。2年の高橋智准さん(13)は「プログラミングをやったことはあるが、Pepperは初めて。他の人にメッセージを伝える動きやコミュニケーションを広げるようなプログラムを作りたい」と意欲を見せた。2年の関内晴輝さん(14)は「Pepperに声をかけ、楽しませたり盛り上げたりする動きをさせてみたい」と期待を膨らませた。



高橋智准教授(右奥)からPepperを動かすプログラミングを学ぶ生徒

食育普及へアプリ

食ベメッセで第2弾発表

東松島



開発した食育アプリのお披露目テープカットする地元中学生ら

東松島市で1日に開かれた「ひがしまつしま食ベメッセ」で、食育の普及を支援する東松島食育アプリの第2弾が発表された。ソフトバンクと石巻専修大、石巻市桜坂高、東松島市の矢本一中、矢本二中、鳴瀬未来中が連携して製作した。アプリは栄養バランスに配慮した主食、主菜、副菜の正しい組み合わせを説明する内容。Pepperを活用し、東松島市の食の紹介やホヤを使ったゲームも開発した。中学3校は食材などのイ

石巻専修大創立30周年 ソフトバンク連携プロジェクト

「知」の可能性 次世代へ

ソフトバンクグループ株式会社の「Pepper（ペッパー）社会貢献プログラム」は本年度までの3年間、石巻圏で展開された。「高大産（高校・大学・企業）連携プロジェクト」を掲げる石巻専修大は同プログラムに参画し、圏域の教育現場で両者連携の事業が繰り広げられた。人型ロボットPepperを中心とした活動は多岐にわたり、東日本大震災からの復興を歩む地域の課題解決へ多くの可能性を芽吹かせた。

課題解決へ連携深化

Pepper社会貢献プログラム

石巻圏の若者 多彩な実践

石巻圏域では石巻市桜坂高、石巻商高、石巻工業高、石巻北高の4校がPepperを取り入れた活動を実践した。

このうち、桜坂高は本年度までの3年間、石巻専修大と共にPepperで地域の魅力を発信する「まちなかポスタープロジェクト」に取り組んだ。ゲームを通して石巻の魅力を発信するアプリ「ホヤフラッシュ」は高校生がアイデアを出し、大学生がプログラミングをした。Pepperに装着し、石巻市かわまち交流センターで利用してもらう計画もある。作成過程では広島市の広島商高と交流し、知恵を出し合う場面もあった。

石巻商高はPepperを活用し、地域課題の解決を目的として、参加した同校コンピュータ部の生徒は「自分と他人の命を守るため、最善の行動が取れるようなアプリを作る」と意欲的だった。ソフトバンク株式会社と推進事業の指定を受けた石巻専修大が中心になって、石巻西高をはじめとした圏域の全高校と連携し、若者育成に取り組み流れた。



ス「スマートコーチ」を活用。昨年11月に石巻市山下の野球部を対象にした活動が始まり、同大野球部の学生がアドバイザーとして活躍。

ソフトバンク 高際さんに聞く

ソフトバンク株式会社の社会貢献担当として、石巻専修大と共に石巻市、東松島市との包括連携協定などに携わってきた高際均・地域CSR1部担当部長は2月、広島県に異動する。兼務する公益財団法人「東日本大震災復興支援財団」では女川向学館での中学生向け英語学習プログラムや同

復興へ若者の力必要

起業につながる活動期待

「どんな視点で活動してきたか。」

「地域活性化と若者育成だ。石巻専修大とPepperを使って地域の魅力や活動を振り返ってもらった。」

「力すごいと思う」

「石巻圏の復興の現状をどう見るか。」

「心の復興にはまだまだ時間がかかる。震災で受けた苦しみは永遠になくならない。その中でも若者の活動で街が新しく生まれ変わり、その躍動感の中で、少しずつ心のわだかまりが溶けていく場面が出てくることを祈っている」

「『東北絆CUP』では石巻市民球場でプロ野球選手OBを招いて地域交流をしました。絆CUPには野球、バスケット、サッカー、吹奏楽、自転車の各部門で東松島市、石巻市、女川町の中学生にも参加していただいた」

防災教育を発信した。復興を成し遂げ、過疎化に打ち勝つには若者の力が必要。地域唯一の大学である石巻専修大の役割は大きい。

「Pepperや情報通信技術（ICT）を活用した中学校への部活支援などを通し、企業、大学、高校、中学校と少しずつ縦のつながりが生まれている。」

「石巻西高は文科省の『地域との協働による高校改革』に無料で招待してきた。今年も実施する。その卒業生が石巻市の政策コンテストに応募した。若者の

「離任にあたり一言。」

「ソフトバンクは、これからICTの力を活用し、多様な分野で石巻市・東松島市・女川町の復興支援、若者支援に取り組む。地域の皆さまには、大変お世話になりました」

石巻専修大 プロジェクト担当者から

学生と中学生 信頼関係育む

杉田 博教授

前年度試行での「教える」撮影した動画を見ながら大学生1人教えられる中学生という関係を反省し、本番となる本年度は学生と中学生的なマンツーマン体制を基本とした。それにより、そのためには他者とのコミュニケーションとそこから生まれる信頼関係が大切ということを実感したよう。

先端の技術で 活性化の知見

佐々木慶文准教授

担当したテーマでは、高学年がコンテンツ収集やアプリ開発を行い、大学生が技術的サポートを行う形態で活動しました。高校との連携では多少なりとも困難な点がありましたが、関係者の多大なる協力の下、双方の強みを生かした取り組みができたと思います。今回の活動では、最先端技術を用いた地域活性化の今後に向けた新たな知見が得られました。参加者の皆さんも個々に得るものがあつたようで、これも大きな成果の一つと考えています。

種まきの3年 花を咲かせて

舛井 道晴准教授

3年間を振り返って印象に残ったことは、高校生・大学生の取り組み姿勢の良しです。教員以外の顔触れは毎年変わるにもかかわらず、高いモチベーションを維持して活動を継続できたことは、若者たちの興味・関心を引く要素がこのプロジェクトの中にたくさんあることを示しています。この3年間は種まきの期間でした。これから何となく石巻の若者たちがこのプロジェクトに参画し、立派な花を咲かせてほしいと思います。

出前授業通し 防災意識向上

高橋 智准教授

約450名の小中学生に地域防災を考える出前授業を行うことができました。習得することができたと感じています。出前授業の運営や防災クイズアプリを作成した高校生と大学生も地域防災に対する理解が深まったとともに、課題解決に向けた自主性や情報発信能力を高める良い機会になりました。

ビックデータ 活用方法探る

位置情報解析



ソフトバンク株式会社の関連企業で位置情報のビッグデータを収集、解析する専門会社「Agoo（アグー）」（東京）は、観光客数などの統計的な実態を把握する製品「Papilio（パピリオ）」の活用方法を探究した。ビッグデータを把握したの流を可視化した画面を見ながら、専修大の学生（右）が活用方法を探究した。

3者の意見交換は昨年12月にあり、石巻専修大経営期待感を示した。



離任を前に、石巻圏への思いを語る高際さん

Pepperと育むまち 未来



(左から)池田部長、亀山市長、尾池学長

鼎談「復興と産学官連携」

ソフトバンク株式会社と石巻専修大は本年度までの3年間、人型ロボットPepper(ペッパー)を活用した連携事業を展開してきた。石巻市と包括連携協定を結び、情報通信技術(ICT)を活用した地域課題の解決にも取り組む。東日本大震災からの復興に向けた連携の意義と成果、展望を亀山絃市長、池田昌人ソフトバンクCSR統括部統括部長、尾池守石巻専修大学長が話し合った。

包括連携協定

ソフトバンクと石巻専修大、石巻市は昨年1月、包括連携協定を締結した。この1年の活動をどう評価するか。

亀山氏 ソフトバンクグループ株式会社の「Pepper」社会貢献プログラムを通じて、子どもから大人まで、幅広い世代にPepperの魅力を伝えることができた。協定は多世代の教育に大いに役に立っている。協定を結ぶことで大学、ソフトバンクの力が結集でき、素晴らしい形になった。

Pepper 社会貢献プログラム

Pepper社会貢献プログラムは最終年度になる。石巻圏でも多様な取り組みが展開された。

出席者

石巻市長 亀山 絃氏
ソフトバンクCSR統括部統括部長 池田 昌人氏
石巻専修大学長 尾池 守氏
(司会・三陸河北新報社取締役編集局長 今里直樹)



かめやま・ひろし 1942年石巻市生まれ。神奈川大卒。塩釜高教諭、東北大工学部講師、石巻専修大教授、同大開放センター所長などを経て09年の市長選で初当選。現在3期目。

石巻専修大創立30周年

ソフトバンク連携プロジェクト

高大産連携

池田氏 ソフトバンクがビジネスなら発注者と受注者(企業)の社会的責任の観点で、石巻と接点を持つ。3者が同じ方向を向き、市民に何を、いつまで提供できるかを議論し、組み立てていくようになった。尾池氏 3年ほど前、地域の高校と高大連携に取り組み、より社会に貢献できるプログラムを探り、始めた。ソフトバンクの力を活用し、山手の中野球場を指導している。

石巻専修大がソフトバンクなど推進した高大産連携は復興を歩む石巻市に活力を生み、育んだ。その意義をどう見るか。亀山氏 震災発生時、石巻専修大はボランティアの拠点となり、復興に絶大な役割を果たした。石巻は被害が甚大だった半島沿岸部を抱え、地域ごとにさまざまな課題が生じた。再建に何が必要か、大学の知見を

基に協力をもらった。産業振興の面では、具体的なプロジェクトを展開するまで進んだ事例もある。一連の取り組みは復興を加えたのがソフトバンクであり、石巻市だ。震災からの復興に資するだろう。石巻に大学があつて本当に良かったと思う。復興支援、大学自らの

地域発展へ貢献期待 亀山氏

課題探り社会に発信 尾池氏

新たなCSRを実践 池田氏

いかにうまくロボットを活用できるかが大切。その意味で実践教育としては素晴らしいと思う。プログラムを通じて、震災伝承や防災、インバウンド(訪日外国人旅行者)対応など、子どもたちから多様な提案があった。亀山氏 Pepperはさまざまな分野で活躍している。観光、教育、スポーツ、産業振興を含め、市にとって魅力的だった。

復興という視点で高大産連携をどう捉えるか。尾池氏 復興には物の復興、心の復興があり、その関わりは復興支援というCSRだった。池田氏 震災から今まで走り続けてきた。最初に始めたのが「チャリティホワイ」という新料金プランの取り組み。ユーザーに



いけだ・まさと 1974年川崎市生まれ。法政大卒。97年東京デジタルホン入社。18年にソフトバンクCSR統括部統括部長。公益財団法人東日本大震災復興支援財団理事も務める。

多くの世代が一緒にPepperを使い、プログラミングを通して表現したり、相手に伝えようとした。そういうツールはなかった。社会貢献プログラムの取り組みは裾野が広い。大学が加わることで受け入れのキャパシティも広がった。教員は地域課題に専門的な立場から助言をし、社会貢献の意識を高めた。それがプログラムの効果であり、成果だろう。

関係が構築されていった。ソフトバンクは復興支援を機に、各地にCSRの社員を配置した。東北は仙台を拠点に12人のCSR専門の社員がいる。担当する市町村と人間関係を築き、状況を把握し、企画、実践する新しいCSRへと発展したのはいずれも成果だ。

ポスト復興

2020年度は石巻市の復興計画の最終年度になる。その意味で「産」の復興計画の最終年度になる。その意味で「産」の復興計画の最終年度になる。

鍵は観光 ICT活用 亀山氏

「情報」を軸に新学科 尾池氏

世界見据え共に変革 池田氏

ポスト復興で3者の連携はさらに期待が高まる。亀山氏 本市が持続可能なまちとして発展していくためには、人工知能(AI)や5G(第五世代)移動通信システムといった時代の存在は大きい。



おいけ・まもる 1954年生まれ。群馬県出身。東京工科大学大学院修了。工学博士。科学技術庁航空宇宙技術研究所などを経て、02年石巻専修大教授。16年から学長。専攻は流体力学。

国が日本にどういう関心を持ち、どういう買入れ物を求めているか。情報をしっかりとキャッチアップする必要がある。人流解析といったICTも活用し進歩していかなければならない。石巻専修大は本年度、30周年を迎えた。圏域唯一の高等教育機関として役割をどう果たしていくか。尾池氏 社会が求める教育課程を作ることが肝要だ。重要なのは情報だ。経済学、社会学、教育学、自然科学的に情報をマネジメントする。学際体制、教育体制をマネジメントするには

制を強化していく。石巻専修大は石巻地域と共生する大学だ。たしか石巻も、東北も人口が減っている。学生をいかに広く集めるか考えないといけない。残れない。そのためには地域に根差した課題と世界の課題の両方に対応できる学科にしていきたい。ソフトバンクは石巻圏とどう関わり続けるか。池田氏 2020年は通信事業者にとって変革の年だ。5Gの商用化でIoT(モノのインターネット)が本格稼働する。通信会社が本格的に動く。通信会社を超え、さまざまなサービスや機会を提供する会社になつていく変革のタイミングだ。社会貢献プログラムはPepperというロボット単体だったが、IoTのようなより高度な、より広範囲で面目が増えるものが必要だ。私たちがオールソフトバンクで東北を復興させようと呼んでいる。石巻、東北はポテンシャルが高い。新しい取り組みを先進的に進める自治体や人材も多い。「震災で石巻は大打撃を受けた」という印象から「最も元気になった東北の都市は石巻」となればメッセージ性は高い。世界を見据え、一緒に変化していくパートナーにソフトバンク全体がなれたらうれしい。